

三十余年、石は毀ち銘傷の文字は磨滅したが、願主沙弥の真心は。経石さまの祭り。として、いままお部落の年中行事に残っている。

津志河内から柏江に行く道は昔も今も変らなない。広い水田地帯をよぎり、堅田川にせまる山の端をまわれば柏江の部落になる。

十七番霊場金剛山江国寺は部落の西端にあり、堅田郷では最大の禅院である。山門は天領時代の代官所門といわれ、どう見ても寺にふさわしくない武家門、庫裡にも武家座敷めいたものがある。本堂、葉師堂、観音堂、鐘楼など清掃のゆきとどいた境内は清々しい。

札所は観音堂にあり、ここはまた西国三十三ヶ所霊場の九番の札所でもある。そのとき私は法師水願経にある『かの仏の国土は一向清浄にして、女人の形なく、諸々の敬悪をはなれ、また一切の悪道の苦しみをなす』という章句を思い浮かべた。

本堂裏山の墓地に、森九郎左衛門尉吉安の墓塔がある。吉安は佐田藩祖毛利高政の異母弟で、兄高政に従って戦場を馳駆し、まを高政を助けて佐田藩の基礎を固めた陰の人である。柏江、津志河内、塩月、泥谷、波越、石打、西野、府坂、桐野の九ヶ村は、高政が吉安に与えた領地（赤木村四百石と共に二千石余）であった。寛永九年十一月家督争いに敗れた吉安は佐田を去り、領地二千石を幕府に返上し、蔵米取りの直参旗本になつたが、寛永十七年四月江戸で病没した。吉安の死を聞いた柏江の村民は旧領主の恩顧を思い、天領代官に乞うて野中の吉安館を浄地に移して寺庵とし、その境域に供養墓塔を建立したが、万治元年槐川和尚を招じて副基とし一寺を創建、金剛山江国寺と号したという。へ吉安の法名は江国寺殿秀山宗才大居士。

その昔柏江の港といわれたこの村は、天領地内で生産される米、木炭などの集荷、積出港で数軒の回船問屋があり、港街として繁栄した。時代の変遷によつて港の機能は失われ、明治、大正期を境に一分の農村となり現在に及んだが、いままた堅田川の河川改修事業によつて往時の姿を一度させた。堤防上を走る県道は鋪装され、城郭のような石垣上にあつた江国寺は、県道に沿う一禅寺になつた。昔ながらのものとして江国寺の西、道端にある芭蕉の句碑だけ、『古池や』の万葉假名がわびしい。

(おわり)

資料

佐田と国木田独歩 (5)

「寛永・尾間日記」に見る独歩の動き

会員 山本 保

鶴谷学館生徒富永徳磨、尾間朝の日記を左に掲げます。独歩排斥運動の模様や、上京しようとする師弟の動きを捉えることができます。

明治二十七年二月十日（以下 富永日記）

杣にもたれ、昨日の日誌をよみつつある間に国木田師（独歩）は訪ひ来りぬ。急ぎ取片づけて迎へて書斎に入りぬ。

師は問うて曰く、芳島（向島）に山本篤吉なる人ありやるやと。我知らずと云ひしかば師は苦笑して曰く。

余、今朝起き出で見れば、余が寓居（坂中郎）の庭に一封、余に宛てたる書翰あり、山本修吉と曰其差出人の姓名なり。余開きて之を見れば、之れ余に諫告する書なりき。其の内曰く「君（高橋）は実に偏愛なり。勉強するものを甚だしく愛し、不勉強なる者を甚だしく疎んず。これ果して俸給を取るもの所為となすべきか。君は又我郷出身の矢野（龍溪）氏を罵言せり。君は何が故にかくの如き矢野氏に推されて我地に来りしや。其他云々」とありたり。余は実に驚きたり。余は生れて余り磊落に失するといふ諺は受けたることあるも、かかる隠慮などの非を受けたることなし。其の偏愛云々といふが如き実に愚の至りならずや。これ人情当に然るべき所ならずや。矢野云々の如き、余は其の標に罵言したることなし。

昨日、余はナシヨナル（荏葉語本二卷）の級生が余りに不勉強なるを責むる語中、君等は決して矢野先生の如きを模範とすべからず。彼は己に過去の人返守の人なればなりと云ひしことあるのみ、余が常に彼らを責むるはただ余が一点の赤心を以てなり。然るに情通せず語のみ通ず、悲しむべし。

然れども之れ現今の教育界の状弊なり。師父の交りは只表面的にして、情と情と合し愛と愛と結ぶものに至りては殆ど絶無。非常の感慨なる談話ありて後、其の誰ならんと問ふ。我答へざりしも師は云へり。石丸（敏一、生徒）を除きて他に其の人あるべからずと。我も石丸が新師（其独歩）につきて不平を抱く人なるは誤なきを告げぬ。師曰く、若し此の書にして館外より来らばよし、若し生徒ならば更に慨すべし。石丸の如きは欠席勝に不勉強極まりなし。

何き苦しんで之きをなす。

談話は教育の事に移り、火鉢を叩きて語り合ひぬ。

（註）山際に下宿して其独歩は、あつた向島の富永徳庵定まて若れて、投書の件について聞いたました。

二月十一日

師は曰く。「先日我庭へ遺書（投書）したるもの正確かに石丸なり。余昨夜彼を呼びて問ひしも知らずと答ふ。されど彼なるは明らかし。之に付けて君等にも一の望むべきことあり。石丸は曰へり。生等は同期の中にも富永（徳庵）、飯沼（源治）を除きては共に語るに足るものなし。

然るに今も且に隔りて密ならず。矯風会事件より以てするも、其の非は之等帰して我方になしと。彼等をしてかく感ずるに至らしめしもの豈ま友君等の失なしとすべけんや。由て将来願はくは余を中心とし、又々たる黨派心を捨て、堂々として且つ密やかなる交情を結ばれんことを。」

師よ、我も然か感ず。（下里）

二月十七日

午後七時半、益友会に出で見れば会場寂として暗く、隻影なし。八時頃より人集まり、それより演説あり。先づ下川敏夫、山口政策、山口行一君演説終るや、蹶起して演壇に現はるは石丸敏一、其の演題として呼びしは「會員諸氏に訴ふ」なり。すは予て期したる折は来れり。彼如何なる事を云ひて我等を攻むるか。彼曰く。

「一人の教師と二人の生徒あり。しかして奇妙なる勸告書の教師の手に落ちし時、彼は之を一生徒に問ひしに、一生徒之を他生徒の所為なりと告げしと飯

定せよ。之れ果して友誼あるものとすべきか。友の悪き目の前に責むるこそ親友たるもののなすべき事なれ。さるを、それと直ちに其の師に告ぐる、之れ実に如何ぞ也。

況や其の人に於て其の行なくば其の憤りや果して如何。古來歴史に接するに疑念日ど人を殺し、社会を毒せしものはなし。然るにこの疑心を挾んで慢りに人を上下することはそも何事ぞ。或る國家の政治を論じ教育を論ずるものに告ぐ。さる大なる経倫をなすよりも、乞ふ先づ自家の疑心を払へ」と。

咄、何たる事ぞ。我を以て汝は一人の好物とすか。我より國水田へ態々告げしものとするか。汝こそげに人を疑ふ者にあらずや。(中略)

我は長き彼の演説を黙聴し、終りて直ちに立ち、それとはなしに我感情を述べて反駁せり。彼も亦終に首を垂れて黙聴せりしが、國水田師は我演説の中に会に入り来り我が演説の終るを待ちて、一言の許可を会場に問ひしが、委員は逡巡して答ふる所をかりしに、國水田師をまうかねて去様に規則張らずとも可ならずと云ふ也、田川は親しく答へたり。否々、会内は且会則あり、是非之を守らざるべからずと。國水田師曰く。余は規則の外に立たん事を願ふ人情に訴へられんことを欲すと絶叫するや、規則は会の生命なり、本会の命脈の繋る所なりと論じ、互に案を叩き目を瞑らして激論せしが、委員の資格にて終に解散せり。時、十時。

(註) 独歩の前住者久代考次師の時から、学館の生徒が互になつて「益友会」というものを組織して、毎週の日曜日に会を催して、演説会と討論会とを交互に行なつたり、「益友」という雑誌を出したりして、お互いに切磋琢磨してました。

二月二十六日

夜、鶴谷学館に出る途中、國水田師に遭ひ、談話あれはと云ひければ我家に併ひて聞けり、「鶴谷学館下級生一同は退校願書を差出せりといふ。予其の何の故たるを知らず。

されど思ふに邪推かば知らざれど、かの石也(敬二)等一派の如きあり、予が矢野文雄氏を攻撃せし故を以て何事をか計りしならん。之を以て矢野氏崇拜の先輩等が彼らを唆教してここに及ばしめたるるべし。然らずんば彼等其自身何でかかる勇氣あるべけんや」と。我も然か思ふ。

夜、鶴谷学館に出れば、中島翁(漢学教師中島一郎)は奇妙なることを語り出づぬ。曰く、「本校乙級(下級生)は皆退校せしと聞く、之れ彼等と教師と又生徒中の耶蘇教連(キリスト教信者)との不和に出でしといふと。然らん、國水田師に反抗する、是れ師(独歩)がキリスト教者なればなり。ああかの無邪気なる乙級を暗に煽動するもの心事は之に由て顯はれたり。

我は之を聞きて怒心頭より発せり。今亦彼等奸人の奇策を聞き、我は真に怒れり。来れ、石也、國水田川、高橋、汝等已に挑戦す。我も戦はん。汝等には先華なる權あり、我等には正義の權あり。

(註) 鶴谷学館生徒が独歩派(進歩的グループ)と中島派(保守的グループ)にわかれて対立しました。

四月二十四日

午後國水田師訪ひ来り四時まで談しぬ。毎度ながら談話は少年の腐敗に向つて走りぬ。(中略)

師曰、「予は今も思ひ、西途に向ふ。やめて東
京へ赴かんか。或は止りて武務を尽さんか之なり。
惟ふに鶴谷学館は夏以後開校せん。去らんと欲せば
予は去るべし。若し止らんとするは、今より運動せざ
るべからず」と。

四月二十六日

今日、国木田は何事か重大な事件の相談すべきもの
あり、近日の中集りて明さんと云ひたり。

四月二十八日

昨日すでに午後十時、国木田收二君に伴はれて教
会。終りて師の寓に導かれぬ。こゝに予が生涯中に於
て最も記憶すべき夕なるべし。

師が語り出せしは、我等互に世より選び出されて
稍高き眼、稍高き理想、精神を有するものとされり。
考ふれば、吾人が尽すべき責任は前途は横ばりて山
となし、川とすなり。

あゝ吾人は人類なり。吾人は國民なり。しかも亦
一個人なり。之を思へば予は実に愴然たる(いたましき)
を覚ゆるなり。何を以てか愴然たる、青年再び来ら
ず、歲月新なりがたし。かくして夢の如く暮し、幻
の如く送り行く。之実に人類中最も哀れなる事なら
ずや、殊に我等が平素の行動思想等を有しながら研
きもせず、実施もせず、空しく年と共に朽つるなき
やき考ふるに至りては、予は実に腸を断つ思ひあり。
日本の大勢、世界の活勢よりするに、予等はかかる
辺境に空しく朽ち果てて可なる者ならんや。

予はこゝを以て策を献ず。今秋の初め、予も多分
上京の都合となるべけれど、兄弟も一奮予等と行き

同じうせよ。東京は広く学生多し。固より非常の困難
なるは言ふを待たざれども、予等が前途を思へば此
式の困難又何程の事かあらん。生活の如きに至つて
は決して飢寒に迫るが如きことばあらじ。

予等五人かりに一戸の貸屋を借るとせよ。その間
自炊し、寢を同うし、其他を節せば、世人の見て実
賤なりとせる職業に少しの給金を得て以て日を送り
行くを得べし。而して互に業をばね相携へて進ん
行かば、怠けし東京青年の中、一頭角をまたげんと
期して待つべきなりと。

此談話は案外なりき。予は直ちに心よりの予が同
賛を表しぬ。並河(平ニ)も鹿間(明)も全幅の賛成を
表しぬ。談話はこゝにまとまり、往路(上京)の旅費
と、一二月の糧とを準備せざるべからざることをも
話し、如何に楽しからんなどと語り出づ。帰りし日
十二時、天晴れて星きらきらと満空にかがやき、気
自ら悠なるを覺えぬ。

五月十三日

薬師寺(寶蓮)等を訪はんとて本所にて国木田兄弟
と鹿間とが山口(平ニ)を訪ひ出すに合ひ、共に船頭
河畔に出で、往吉浦に出で、こゝに繋げる一隻の小
舟を借りうけて番匠川に浮かび出でぬ。川の中に山
口へは上京すべき相談を掛けたる所、彼は甚だ容易
く同意、同行すべきを答へて一同大いに喜びたりき。

七月十六日

七月も己に半ばとなり。国木田師も最早帰郷の節
近くなりたれば、上京のことに付て相談せんとて同
盟なる並河、鹿間、山口と四人、夜国木田師を薦へ

下宿光)に訪ひぬ。

時しも旧曆十四夜、盃蘭盆の前一日、月田く澄天にかかり、潮漫々として波なく、師は予め一葉の舟を儀しあり、之に葛餅など用意しあり、即ち漕ぎて潭心に出でぬ。

水静かに鏡の如く、月光上に浮んで金波滂くが如く、四圍の山々は黒きあり、青きあり、漁村の燈火は守後、穴の方にはちらちらと見られぬ。而して漕ぐを停めて流れにまかせ、各々胸襟をひらいて相語りぬ。

曰く、上京するにも、曰く、上京したならば、曰く、鶴谷学館。

十一時半となりしかば歩いて帰りぬ。

七月二十二日

午後、尾間、並河、山口と舊なる国水田を訪ひ、閑談激論交々湧き、最後の目的を語り合ひなどして、晚餐と餐せられ帰りぬ。

七月三十日 独歩離別の辞 (以下尾間日記)

国水田氏及今迄の来歴及び将来の方向に就て生徒に訓示したり。

その中に、外國語を学ばば、之によりて衣食を乞ふんたかにあらず、世の学者、青年才子が往々之によつて其の身を誤るもの多し、余等が外國語を学ばば、即ち維新の際五ヶ條御誓文にある、広く知識を世界に求めんが為なり。苟も高尚なる知識を得んと欲し、如何なる方面に於ても常に英雄を望みつつあり、目下日本の形勢を察する事を得ば、其の人必らず外國語に由て高尚なる知識を求むるの外なし。

伊藤首相(譯文) 渡辺國武(葦相)の如き、一見平凡人の如きも決して怒らず。伊藤は英法を自由自在に語り、渡辺は仏語に妙を得たるものなり。此の学殖識見は即ち今の高地位を占むることを得たるなり。故に若し高尚なる知識を求めんと欲せば、必ず外語を完全に習得せざるべからずと赤誠をこめて僅々十五名の生徒に語れり。

十五名とは、高橋庸吉、飯沼源治、並河平吉、山口行一、栗尾武考、岡崎誠、木村重樹、尾間忠經、飯沼喜三、関谷長治、日置貞夫、山口有巳、千葉敬一、高妻弘道、尾間明。

八月一日

風雨稍凄くて入船はなからんとのことなり。

朝は国水田兄弟及び多くの鶴谷学館少年生徒等と泳ぎなどしたり。

九時の頃、山口、並河、薬師寺は来りぬ。薬師寺は我等をすゝめて十時より帰ることになり、船は未らざるべけれどして帰りぬ。

帰りて鶴谷叢誌への投書を作り終り、之を委員の許に送りぬ。

二時頃船は来れり。国水田師は去りつるなり。

(註) 鶴谷学館を退職した拙者は、弟俊二を伴つて、八月一日葛港より乗船し、佐伯と別れを告げました。

花暦

余自の埋草までは、城下町四番折々の花の友よりき。

爛梅や重たけはただひそと咲き、

(一月十二日、豊海、粟、土屋邸の前、畑、小きけれど満開)

隠察に寒紅梅のほこるべて

(一月十八日、養賢寺の角、五分咲、すべに見こるなり)